

産経新聞

米英仏の多国籍軍によるシリア攻撃には2つの謎がある。1つは、なぜ攻撃の当日にプーチン大統領の与党「統一ロシア」のアンドレイ・トルチャク書記長がダマスカスを訪れていたのか。2つは、なぜ攻撃の当日にプーチン大統領は、硬化した内外の世論を背景に、抗議の姿勢を示す必要があった。トランプ氏は、

歴史の文差点

フジテレビ特任顧問 山内昌之



かだ。もう1つは、米英仏の攻撃直前にアサド政権とロシア政府が、イラン兵力のシリア撤退と引き換えに、空爆中止を求めたという噂の真偽である。前者の説明は比較的たやす

い。アサド政権による化学兵器の使用疑惑をめぐって、トランプ大統領は、硬化した内外の世論を背景に、抗議の姿勢を示す必要があった。トランプ氏は、

基地やミサイル防衛システムを狙わず、直接衝突を回避する枠内で実行せねばならなかった。プーチン氏は、2017年4月の米軍のシリア攻撃と同じく、ロシア優位のパワーバランスを覆さない限り、米国の作戦がシ

現を使ってもロシア軍に被害が出ない限り、米国の正面衝突に踏み切る可能性は限りなくゼロに近い。トルチャク氏がダマスカスで関係国の説得と調整にあたった可能性は否定できない。

露関係を維持するためにイランとの同盟を犠牲にする必要はない。他方、プーチン氏はアサド政権やイランのためにイスラエルと衝突する考えもない。イスラエルは、日本では注目されていないが、昨年9月の中部ハマの兵器開発本部の空爆以来、ほとんど毎月のようにシリアを空爆している。イラン革命防衛隊の将校が戦死しても、イスラエル軍が報復された事実はない。それは、イスラエル軍がシリアに展開するロシア軍のS300、S400、パーンツィリなど最新のミサイル防衛システムを攻撃しないからだ。ロシアは地上でアサド政権とイランの同

シリア攻撃2つの謎

リア問題を解決できず、今後もアサド政権の化学兵器利用を阻止するメカニズムを作れないと見切っていた。もちろん、安保理や米露の対立にもまして協力の必要性を熟知するプーチン氏は、レトリック上では厳しい表

第2の謎や噂の信憑性は低いだろう。なぜなら、プーチン氏はロシア軍が攻撃され兵士に被害が出る場合、「瞬時の報復」に出る可能性に何度も触れているが、米軍はそうした行為に出ないと確信しているからだ。米

盟国兵力に犠牲者を出しながら、「冷酷なまでに現実的な戦略」をとっているのだ(『アルジャジーラ』4月15日)。プーチン氏とトランプ氏の間でも好んで衝突するとは思えないが、レトリック攻撃の応酬が緊張の極致に達する危険性も否定できない。米露は、シリア和平を進める上でロシアほどの当事者能力を持たないだけに、アサド政権が化学兵器を再び使うなら、トランプ氏の妥協の枠を狭めることになる。彼の次なる行動を見守るのは、北朝鮮の金正恩氏だけでなく、日露関係への衝撃を懸念する安倍晋三首相でもある。(やまうち まさゆき)